

彼は青空の下、高い所を悠々舞っている鳶の姿を仰ぎ、人間の考えた飛行機の醜さを思つた。。。。人間が鳥のように飛び、魚のように水中をゆくという事は、果して自然の意志であろうか。こういう無制限な人間の欲望が、やがて何かの意味で人間を不幸に導くのではなからうか。人智に思い上つている人間は、何時かその為に酷い罰を被る事があるのではなからうかと思つた。

志賀直哉作

「暗夜行路」十四章より